

苦悩を突き抜けて歓喜へ —職業音楽家 ベートーヴェン—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

古典派と呼ばれる18世紀ヨーロッパの音楽家たちは例外なく王侯貴族に仕えていた。宮廷音楽に代表されるように彼らは特権階級の公的・私的なセレモニーの一環として作品をつくっていた。

だがルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)はパトロンとの主従関係を拒否し、一般の民衆にも開かれた独自の音楽を追求する。幼い頃からピアノの名手として家計を支え、作曲活動を通じて経済的にも自立したベートーヴェンは史上初の職業音楽家とっていいだろう。

比類のない孤高の音楽家としての道のりには幾多の試練が待ちかまえていた。音楽家にとって致命的な難聴を患うことによって何度も自殺への衝動に駆り立てられる。それでも音楽への燃えるような情念がベートーヴェンを絶望の淵から引き戻し、新たな復活の調べを奏で始めた。

支配を嫌い革命を夢想

ベートーヴェンは神聖ローマ帝国ドイツ領ボンで宮廷テノール歌手の父ヨハンと宮廷料理人の娘であるマリアを母として生まれた。今年で生誕250年を迎える。ヨハンは無類の酒好きで収入も途絶えがちになり、宮廷バス歌手から宮廷楽長にまで出世した祖父の援助で生計を立てていた。

幼少時に頼りの祖父が亡くなると生活が困窮し、父はベートーヴェンに一家の命運を託そうと日夜ピアノのスパルタ教育を行う。過酷な練習に一時

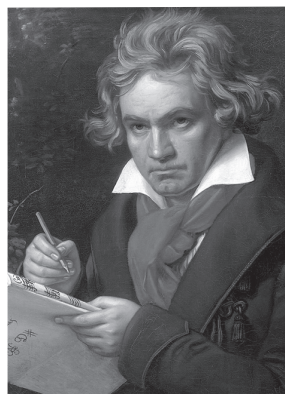
は音楽が嫌いになったものの天性の才能を発揮し、13歳で宮廷礼拝堂のオルガン奏者に抜擢された。

16歳になったベートーヴェンはオーストリア帝国の憧れの音楽の都ウィーンを演奏旅行で訪れる。尊敬するモーツァルトに会い、熱心に弟子入りを希望した。ところが肺結核を患う母マリアの危篤を知らされ、すぐに帰国する。回復への願いもむなしく最愛の人はまもなく永眠した。

1789年、自由・平等・博愛を掲げたフランス革命によって絶対王政が打倒され、新たに共和制の政府が誕生する。19歳のベートーヴェンは熱烈に革命を支持し、特権階級から解放される新時代の到来を夢想した。とはいえ現実には理想にほど遠くアルコール依存症で失職した父に代わり、ピアノ演奏を掛け持ちして二人の弟を養った。

やがて待望の転機が訪れる。旅行でボンに立ち寄った古典派の大家ハイドンを才能を認められ、彼の弟子となってウィーンに移り住む。まもなく父が亡くなり、成長したベートーヴェンはピアノの即興演奏の名手として脚光を浴びた。

演奏活動の傍ら作曲の勉強に精を出し、処女作



ベートーヴェン

のピアノ三重奏曲を発表する。これを契機に本格的に作曲家への転身をめざす。

独立心が旺盛で権威主義的な支配を何よりも嫌ったベートーヴェンは師匠のハイドンとも訣別する。楽譜に「ハイドンの教え子」と書くように命じられると「私はたしかにあなたの生徒だが、教えられたことは何もない」と突っぱねた。

運命がドアを叩く音

快進撃をつづけていたベートーヴェンも20代後半から難聴の悪化に悩まされる。原因は耳硬化症あるいはワイン好きが災いして甘味料の酢酸鉛による鉛中毒などの諸説が流布されている。

1802年、夏の避暑地のハイリゲンシュタットで温泉治療を試したものの効果がなく自殺を決意して弟たちへの遺書をしたためる。「希望よ、悲しい気持ちで、おまえに別れを告げよう」と。しかし遺書は途中から絶望を超える再生への意志表示に変わっていく。「私を引きとめたのは芸術だった。自分が使命を感じている仕事を成し遂げないで、この世を見捨ててはいけないように思われたのだ」。ベートーヴェンは難聴という未曾有の苦境のなかで使命を果たす覚悟を固めた。

作曲に際しては特注のピアノと口にくわえた指揮棒で音の振動を感じとり、聴力があつた頃の音の記憶と知識で譜面を埋めていった。その結晶として1804年の交響曲第3番「英雄」を筆頭に10年間にわたって第5番「運命」、第6番「田園」など中期を代表する大作を次々と世に送り出す。とりわけ「運命」は闇から光へと至る劇的な構成でシューベルトらのロマン派の先駆者となった。冒頭のダダダダーンというフレーズの意味を訊かれて「運命がドアを叩く音だ」と答えている。

交響曲と並行して三大ピアノソナタといわれる「悲愴」、「月光」、「熱情」も完成させた。貴族の娘テレーゼに捧げられた「エリーゼのために」はベートーヴェンの悪筆でタイトルが誤読され、エリーゼになったと推測されている。音楽の造詣が深くベートーヴェンの伝記も書いてノーベル文学賞を受賞した作家のロマン・ロランはこの時期の作品群を「傑作の森」と表現している。

40歳の頃、ほとんど聴力を失い、神経症による

腹痛や下痢に苦しめられた。同時に後見人として可愛がっていた甥のカールがたびたび自殺未遂を起こし、精神的に追いつめられる。それでも踏みとどまり、日記に「おまえは自分のための人間であってはならぬ。ひたすら他者のために。おまえにとって幸福はおまえの芸術のなかでしか得られないのだ」と書き記した。

天に轟く晴れやかな合唱

1814年、オーストリア帝国外相のメッテルニヒはロシア、イギリス、プロイセンなどに呼びかけてウィーン会議を主宰し、ヨーロッパ全域で専制君主制を復活させることを宣言する。宰相の座に就いたメッテルニヒは秘密警察や検閲制度を使って反体制派を弾圧する恐怖政治を強行した。

これに対抗するようにベートーヴェンは合唱によって自由を謳歌する「^{よろこび}歓喜の歌」を挿入した交響曲第9番を書き上げる。友人に宛てた手紙で「私たちはひたすら悩むために、そして歓喜するために生まれついているのです。最善なのは苦悩を突き抜けて歓喜に至ることでしょう」と作曲の動機を伝えている。

晩年は病床に臥し、10番目の交響曲に着手したものの未完成のまま肝硬変で56年の生涯の幕を閉じた。遺書には「諸君、ご喝采のほどを、喜劇は終わりぬ」と記されていた。葬儀には約2万人が参列し、ベートーヴェンを追うように翌年病死したシューベルトの姿もあった。

音楽的にも思想的にもベートーヴェンの集大成となった交響曲第9番は1824年に初演された。ウィーンのケルトナートール劇場で80人を超えるオーケストラ、4人の独唱者、約100人もの合唱団で聴衆を圧倒した。ベートーヴェンは指揮者の横に立ち各楽章の始まりのテンポを指示した。最終楽章の「歓喜の歌」は天に轟くような晴れやかな合唱で会場は異様な熱気つつまれた。興奮した聴衆はアンコールを繰り返し、5度目に警官によって制止されたこと伝えられている。

万雷の拍手喝采が聴こえずベートーヴェンだけはひとり聴衆に背を向けて立ちつくしていた。アルト歌手に上着の袖を引かれ、ようやく振り返ると歓喜に充ち溢れた聴衆の顔が見えた。